



# 境界あれこれ

3

～ 大人と子どもの境界 ～

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸由里子

## はじめに

最近の若者は幼い、高校生も下手すれば小学生レベルだと聞く。民間会社で働いていたときも、先輩は後輩を「甘い」とか「大人になっていない」などと言っているのを聞いたし、自分たちと比較して後輩の気持ち、仕事への向かい方などに対し、「緩い」「甘い」感じがしたのは私も例外ではなかった。年々人生が長くなってきた中で、我々は何を基準に大人と子どもの境界を設けているのか、今一度、現状に照らし合わせながら考えてみようと思う。

## 法的な境界

法律上、大人と子どもの境界はどこにあるかと言えば、契約や刑法の観点では20歳という年齢になる。20歳になれば、様々な契約ができる。つまり、社会的な責任を負える年齢という判断がなされると言うことだろう。犯罪を犯せば実名報道されるのも20歳以上だ。

一方、婚姻の観点では、男性が18歳、女性が16歳以上である。女性と男性で年齢差があるのは、日本の文化に由来する。元々明治憲法で定められた17歳と15歳が、戦後18歳と16歳とされたが、この2-3歳の差というのは、昔からそのくらいの差で婚姻が繰り返され

てきた結果である。女性の方が成熟が早く、子を埋める年齢を考慮し、男性は家を支える役割を担える年齢を考え、こんな差が生まれたようだ。もし婚姻年齢を18歳にするのであれば、前述の考慮からすれば男女差は必要なくなるだろう。

また、運転免許証は18歳以上であり、これは男女の差はないし、昨年から選挙権も18歳以上となった。被選挙権はまだ25歳以上のままである。一方飲酒は20歳以上である。離婚に伴う養育費の支払い、子が18歳までが一般的だったが、最近は20歳までとする人が多い。それは、大学や専門学校に子どもたちが進学するようになったこととも関係がある。

このように、大人と子どもの境界は、法律上でも、まちまちであるが、取りまとめれば、16、18、20、25歳の4通りである。

すべて、同じ年齢にすればわかりやすいだろうと思うのだが、なぜこんなにバラバラなのか。

世界ではどうなのか、調べてみると殆どの先進国が18歳に統一しており、その他では、成人と認める年齢を18-21歳の間に設定し、選挙権や婚姻年齢も16-21歳になっている。流れを見ると、最初に選挙権を引き下げ、その後それに合わせて結婚の年齢も下げている。裁判所や保護者の許可の元16歳から結婚できるところもあるし、アメリカなどでは州法によって異なるが、おおむね18歳である。

ある調査の結果から、なぜ選挙権を引き下げたのかという理由を見てみると、学生運動や戦争の影響が第一にあり、加えて若者の成熟度や情報量などを鑑みて引き下げたとしている国が多かった。また学生運動や戦争の影響は、主に1960年代から70年代が多く、変更もその時期で最近の話ではない。

成熟度や情報量については、最近のことで、諸外国では若者がより成長していると捉えているようだ。しかしアイスランドだけは、若者の成熟度が遅くなったとして、1997年に16歳だっ

たものを18歳に上げている。主な理由として、若者が20歳になるまで実家に住み、両親から扶養を受けることも珍しくないことが挙げられていた。

さて、それでは日本ではどうだろう？多くの若者が実家から仕事に通っている。扶養には入ってなくても、例え食費として幾らか実家に入っているととしても、自立した大人と考えるのは難しいだろうか。アイスランドと状況は似ているがそれでもきっと、日本も諸外国に倣って、法律上18歳に統一していくのではと思われる。わかりやすくなるという意味では賛成できるが、実情に合っているかと言うと疑問が残る。

## 様々な社会の大人への儀式

大人になるための儀式というのが、様々な社会・文化で見られる。

日本でいえば、古くは元服<sup>げんぷく</sup>がある。奈良時代からあるこの儀式は、男児が数えて12から16歳になると氏神にお参りして、服装や髪型を変える。余談だが、この時に髪を整えることを「理髪」と呼び、今の理髪店につながる。武家では烏帽子をかぶり、名前も幼名を変え元服名になるなど、世間的にも見た目にも大きく変わった。したがって本人にも大人になった意識が持てただろう。この儀式は江戸時代も続いた。女性では江戸時代になって元服と称し、18歳から20歳くらいで地味な着物に変え、髪型を丸髷<sup>まるまげ</sup>などにし、厚化粧やお歯黒・引き眉など見た目にもわかる変化があった。他にも禪を付けて性に関する知識を授かる禪祝（ふんどしいわい、へこいわい）と呼ばれる儀式もあった。

今も残る日本の元服儀式としては、近江八幡祭りの「左義長<sup>さぎちやう</sup>」（17歳の男子を「元服若衆」と呼び、左義長に火をつける役目を命じられるが、火のついた藁苞を持った元服若衆が左義長に近づくののを他の若衆が邪魔をすることで至難を与え、左義長に火がつくまで続けられる）や栃木県、

石川県、愛媛県、宮崎県、熊本県、その他一部の地域にある中学校では中学 2 年または 3 年になると学校行事として「立志式」(りっししき)、「立春式」(りっしゅんしき)、「少年式」(しょうねんしき)、「元服式」(げんぷくしき)を行なっている。この式は単に校長先生からの祝辞や、子どもたちの代表から答辞など、一般的な行事で、いわゆる儀式という色合いは薄くなっている。

外国でも様々な儀式があり、アフリカや東南アジアではその内容は激しい。

#### <バヌアツのバンジージャンプ>

今ではあちこちで行われているバンジージャンプの元祖である。バヌアツ共和国では成人の儀式として、ペンテコステ島に高さ約 30 メートルのやぐらを組み、ヤマイモのツルを使ってバンジージャンプをする。ヤマイモのツルは頑丈と言っても切れることもある。けがをしたり命を落とすこともあるので、大変勇気がいる。これに挑戦し、成功することで、立派な大人の男として認められるのである。

#### <バナナ族のブルジャンピング>

エチオピアの少数民族のバナナ族では、男子が成人するとブルジャンピングという儀式を行う。これは牛を 10 頭ほど並べ、成人になった男性がそその牛の背中を 4 往復するもので、成功して初めて大人として認められる。

#### <毒アリが入った手袋に腕を突っ込む儀式>

アマゾンの流域に住むサテレ・マウエ族の男子は、世界一の毒を持つといわれるアリが一杯入った袋に両腕を突っ込むことを成人の儀式としている。アリに噛まれ、その痛さに悶絶し、耐え抜くことで一人前の男と認められる。

#### <2m の石を飛び越える儀式>

スマトラ島近海にあるニアス島の原住民は 2m もある石の跳び箱を激走して飛び越え、それができると成人の仲間入りができる。

こんな風に、大怪我をするか、最悪死ぬかもしれないほどの身の危険があると知っていながらそれにチャレンジし、成功することで、大人とし

て認められる地域文化もある。これはとても分かりやすいし、だれもがその人を子どもではないと認められる。そこまで大げさではなくても、キルギスなどでは羊を一頭ナイフで処理できるようになって初めて一人前と認められると言う話もある。勇気、力、技量などを成人の基準としてそれを試すというやり方は分かりやすい。

一般的に先進諸国では 18 歳や 20 歳の誕生日を盛大にお祝いして、大人になったことを本人にも周りの人にも認めてもらうなどしている。

以前アメリカにいたとき、社交界デビューのパーティーに呼ばれたことがあった。同級生がデビューしたのだが、それはそれは盛大なパーティーであった。上流階級ではデビューパーティーが成人したと周知し、本人にも意識を持たせる機会となっている。

我が家では、20 歳の誕生日に今まで預かっていた子ども名義の預金通帳と印鑑を渡した。大した額ではないが、印鑑と通帳を自分で持つと、少し大人を意識できるのではと認めたことである。

それぞれの家のやり方で成人になったことを祝っていると思う。そうした儀式は少しは本人の意識を高める役割を果たしていると思う。現在行われている日本の成人式も、「今日から大人である」との認識を持たせる上では役に立っているのだろう。しかし、選挙権や結婚年齢が 18 歳などとなっていると 20 歳で大人ということとの統一感のなさから、大人になったという実感が薄れる可能性もあり、何か中途半端な感じが否めない。きっと今後は成人式も 18 歳で行うようになるのかもしれない。それが一番すっきりするだろう。

## 現状から見た大人

しかし、たとえ日本で 18 歳に統一したとしても現実、18 歳になれば皆大人だといえるだろうか？

大人と子どもの境界を成長面で考えたとき、何を基準にするかと言えば、身体面の成長ではなく「自立」ではないかと考える。精神的にも経済的にも親から自立し、働き、税金を納め、社会性をもって、自らの行動に責任を持ち、自活していることが、先ず大人の条件ではないだろうか？それを基準とすると、年齢に関係なく自立できていない人が沢山いる。誰かに依存している人も、引きこもりも自立してはいない。引きこもりでは40代 50代の人口が一番多いと言われている日本において、年齢だけで大人と子どもを分けることは現実にそぐわない。

「子どもっぽい大人」「大人っぽい子ども」などの表現もあるように、大人であっても子どもっぽいところがあるし、子どもも妙に大人びることもある。その時々でも様々な表情を見せ、行動上

もばらつくのが「人」である。大人と子どもの境界をはっきり分けることは個体差も大きく、結局できないのかもしれない。しかし、せめて子どもたちに対しては、子どもであることを守ってあげたいと思う。

世界全体がスピーディーになり、情報過多の中で、子どもたちが大人の世界に巻き込まれ、大人と子どもの境界がより曖昧になって、子どもの時代を早く終えさせられているように感じている。

子どもでいられる時間は短い。その時間をしっかり保障してあげることで、子どもは大人になることを望み、成長していこう。大人が大人らしく、子どもの見本となるように生きていくことが、大人と子どもの境界をはっきりさせていくことに繋がるのではないかと改めて思った。